

い も と 文 化

ジャガイモと映画 (9)

<コロッケ>

Web ジャガイモ博物館館長

あさ ま かず お
浅間 和夫

コロッケは、カレーライス、ラーメン、肉ジャガなどとともに我が国の大衆的食べ物であろう。言葉の元を辿ると御存知のように、フランス語のクロケット (croquette) に由来する訛りである。その作り方は肉類、野菜などを予め加熱しておき、これを裏ごしジャガイモとか濃い白ソースに混ぜこみ、小判形、俵形、円形などにまとめ、溶き卵をつけパン粉を塗布して揚げるもの。強調したい材料によりハム、カニ、チキン、ポテトなどの名を冠している。

フランス映画にすばり『Croquette』というルイス・メルカントン監督による1927年の無声映画がある。しかしこれは筆者の期待に反して登場人物の呼び名であり、我が国のものまねタレント美川憲一が映画のタイトルになったようなものであった。

36 ハナ肇の一発大冒険

1968年、邦画。監督：山田洋次。

東京のとある下町商店街で精肉店を営む間貫一（ハナ肇）は、周りからは社長と呼ばれながらも、コロッケ用ジャガイモの皮を剥くような単純な作業で明け暮れている。忙しく店を切り盛りする女房（野村昭子）は、そんな愚図亭主に苛立っており、アルバイトの女店員ひろ子（中村晃子）は、何度遅刻を注意されても馬耳東風のマイ

ペース振りは変わらない。

常連客の女性が、買ったコロッケに毛が混入して来たときクレームを付けに来たシーンも見られた。ある日のこと、外回りの途中で立ち寄ったレストランで、自分のテーブルに相席をして来た見目麗しく、謎めいた美女（倍賞千恵子）と言葉を交わすうちに、ドライブに連れて行ってくれないか頼まれる（写真1）。



写真1 ハナ肇と倍賞千恵子

別に急用もなかったもので、彼女に乞われるまま、フェリーで千葉に向う。そんな二人を追うように付けている怪し気な二人組（石井均、なべおさみ）がおり、目的は、女性が持っているバッグらしい。逃げる女と目的地を京都から富士に変えてから車の前に、一人の青年が倒れ込んで来る。彼を助けるため、医者のいる大きな町へと向かい、旅館の停電騒ぎで宝石を盗まれそうなところを守ってもらう。

バッグが無事だったことが分かった女性は、貫一と青年に、宝石の由来を話して聞

かせる。実は、以前、とある病院で知り合った余命幾許もないフランス人から、アフリカの独立運動の資金として、現地の人に渡してくれと託されたものなのだという…。

ふとしたことで知り合った三人の男女が、一台の車に乗って旅をして行く内に、しだいに互いの心を通じ合わせるようになって行く…という形式自体は、後年の「幸福の黄色いハンカチ」(1977)などに繋がる「山田洋次映画の世界」の原点と言ってもよいだろう。ハナ肇の出演により、明るく軽快な娯楽喜劇に仕上がっていた。

37 ジャがいも

1974～1975年、日本のテレビドラマ。プロデューサー：山内和郎、大村哲夫、大井素宏。

本連載(1)で同名の韓国映画をとりあげたが、今回はNET系列の『ナショナルゴールデン劇場』の枠で放送されたテレビ

ドラマを取り上げる(写真2)。

「ジャがいも」のタイトルは、ジャガイモをよく見ると、それぞれ少しずつ違った形をしている。まるで一人ずつ違う人生や喜怒哀楽、喜びを持ち、雑踏の中で生きている人間たちのような様を例えたのが一つの由来であるようだ。

三沢家は善吉(佐野浅夫)・たみ子(森光子)夫婦と長男・雄一、長女・ひろ子の4人家族。善吉は個人タクシーの運転手をしており、妻のたみ子はコロッケ屋を営んでいて、店は小さいながらも結構繁盛している。

第1シリーズは、かつて20歳の時にたみ子は野々宮家に嫁いでいたが、家柄や格式などの違いなどでいびられた苦勞から家を離れ、手放してその野々宮家に置いて来た子供の春子から23年ぶりに電話が掛かってくるところから始まる…。向田邦子の脚本により、彼女流に“ジャガイモらしき



写真2 出演者たち

人々”が毎日織りなす人生の機微、てんやわんやのおかしさ、哀感、人情を綴っていく。

第2シリーズは、第1話で竜夫（加藤剛）が事故で亡くなり、これを受けて、妹のひろ子、弟の雄次（三浦友和）がどう変わり成長していくのかをテーマに描いた。

38 万引き家族

2018年、邦画。監督：是枝裕和。

東京の下町のボロ平屋。そこに、持ち主である初枝（樹木希林）と全く血縁関係のない人々、つまり治（リリー・フランキー）と信代（安藤サクラ）の夫婦、息子らしき祥太（城桧吏）、信代の妹の亜紀（松岡茉優）の4人が転がり込み、初枝の年金で足りない生活費は、万引きで稼いでいる。社会の底辺にいる家族のような一団だが、何故かいつも笑いが絶えず、仲よく暮らしている。初枝も後に「ありがとうございました」と声を出さずに語るほど孤独を感じていない。

物語の始まりは、ある冬日。治と翔太が商店街でコロッケを買って帰る途中、団地の陰で震えていた少女を見つける。家に連れて帰り、夕食に「コロッケ、もう一個どう？」と渡すシーンもある。その夜、早速お寝小をしてくれるが、警察には届けず、信代は娘として育てることにする。家族6人で海水浴を心から楽しんだり、遠い花火を皆で楽しんだり、皆昔の不幸を忘れて、本当の家族以上！？に仲よく過ごす。

しかし、果物を盗んだ翔太が追われて骨折したことで、警察と役所により家族はバ

ラバラに引き裂かれ、信代は誘拐・祖母の死体遺棄の犯人として留置所へ入ることになる。かくて、それぞれが抱える秘密と切なる願いが次々と明らかになっていくヒューマンドラマであった。

アパートにひとり暮らしとなった治のところに、施設に入れられた翔太が顔を出し、カップ麺とコロッケを仲良く食べたりする（写真3）。観客をして“コロッケが食べたくなる”と言わせそうなシーンが多かった。

是枝監督自体がコロッケ好きで、「コロッケをラーメンに浸すと、コロッケの油とジャガイモが溶けて…。一度やるとハマると思います。」と、日本映画としては1997年の「うなぎ」以来21年ぶりとなるカンヌ映画祭パルムドール受賞の記者会見で語っていた。



写真3 カップ麺にコロッケを食べる父子

コロッケに適するジャガイモ品種としては、いもの大きさから、「男爵薯」（肉色白）・「さやあかね」（黄白）＞キタアカリ（黄）＞「マチルダ」（黄白）などがある。「さやあかね」は無農薬栽培も可能である。